

リンゴ極早生新品種 ‘あおり11’, ‘あおり12’, ‘あおり16’ の特性

今 智之・深澤 (赤田) 朝子・工藤 剛・佐藤 耕・町田郁夫*・山田三智穂**・鈴木長蔵**・石山正行**・北山 弘**

(青森県農林総合研究センターりんご試験場・*青森県中南地域県民局地域農林水産部普及指導室・

**元青森県りんご試験場)

Characteristics of New Early Ripening Apple Cultivars ‘Aori 11’, ‘Aori 12’ and ‘Aori 16’
Tomoyuki KON, Tomoko FUKASAWA-AKADA, Tsuyoshi KUDO, Takashi SATO, Ikuo MACHIDA*, Michiho YAMADA**,
Chouzo SUZUKI**, Masayuki ISIYAMA** and Hiroshi KITAYAMA**

Apple Experiment Station, Aomori Prefectural Agriculture and Forestry Research Center

* Chunan District Administration Office of the Department of Agriculture, Forestry and
Fisheries Office, Section for Agricultural Improvement and Expansion

** Former members of Aomori Apple Experiment Station

1 はじめに

青森県では、8月上中旬に収穫する極早生種として‘夏緑’、‘祝’、花祝 (俗称) ‘ラリタン’、‘ピスタベラ’などが栽培されている。しかし、‘夏緑’以外は酸味が強いなど食味が劣るため、主にお盆のお供え用として利用されている。そこで、当場では食味のよい赤色の極早生種として‘あおり11’、‘あおり12’、‘あおり16’を育成し、品種登録されたので、その特性を報告する。

2 育成経過

‘あおり11’と‘あおり12’は、共に1978年に‘北の幸’に‘ジャ-ジマツ’を交配、育成した94個体の交雑実生の中から選抜された。1980年に交雑実生をM.26台木に接ぎ木してほ場に定植し、1989年に食味等の果実品質で一次選抜した。再度、M.26台木に接ぎ木後、一般栽培管理下で栽培特性を把握し、1995年にそれぞれ‘青り11号’、‘青り12号’として二次選抜して現地適応性試験に移した。また、‘あおり16’は1984年に当時育成系統の67-45 (あかね×レロ11 (東光×リチャード・デリシャス)) に‘夏緑’を交配、育成した59個体の交雑実生の中から選抜された。自根で定植し、1992年に一次選抜した。M.26台木に接ぎ木後、一般栽培管理下で栽培特性を把握し、1997年に‘青り16号’として二次選抜し、現地適応性試験に移した。

現地適応性試験の結果、これら3系統はそれぞれ特徴が異なり、極早生種として着色、食味に優れ、栽培上の大きな問題点がないことから、2001年3月30日に品種名‘あおり11’、‘あおり12’、‘あおり16’でそれぞれ登録申請し、2004年1月13日に登録された。

3 特性

(1) ‘あおり11’

樹姿は開張性で、樹勢は「中」、枝梢の太さ、節間長も「中」程度である。皮目の大きさは「小」で、その多少は「少」である。葉の鋸歯は鋭鋸歯、葉色は淡緑色である。花芽の着きがよく、早期結実性で、腋芽花の着生も多い。また、側枝の発出の難易は「易」で、短果枝の着生が多く、豊産性である。開花日は‘ふじ’より1日程度早い。1果重は230g程度、果形は円～長円形で玉揃いは良い。果皮を被う色は赤、縞は不明瞭で着色量は「中」である。果肉の色は黄白色、硬度は13ポンド程度、糖度は11～12%、酸度は0.4g/100ml程度で、食味は多汁で甘酸適和である。貯蔵力は普通冷蔵で2週間程度である。後期落果があり、その程度は「中」である。耐病性の程度は、斑点落葉病に対して‘つがる’並みに強い。自家不和合性遺伝子型はS7S25である。

(2) ‘あおり12’

樹姿は開張性で、樹勢は「中」、枝梢の太さ、節間長も「中」程度である。皮目の大きさは「小」で、その多少は「少」である。葉の鋸歯は鈍鋸歯、葉色は緑である。花芽の着きがよく、早期結実性で腋芽花の着生も多い。側枝の発出の難易は「難」で、側枝の枝齡が増すにつれて頂芽の形成が悪くなる。開花日は‘ふじ’より1日程度遅い。1果重は300g程度、果形は長円形で玉揃いはやや不良である。果皮を被う色は赤、縞は不明瞭で着色量は「中」である。果肉の色は黄白色、硬度は14ポンド程度、糖度は11～12%、酸度は0.6g/100ml程度で、食味は多汁で酸味がやや強い。貯蔵力は普通冷蔵で2週間程度である。後期落果があり、その程度は「中」である。耐病性の程度は、斑点落葉病に対して‘つがる’並みに強い。自家不和合性遺伝子型はS7S24である。

(3) ‘あおり16’

樹姿は中間型で、樹勢は「中」、枝梢の太さは「中」で、節間長が短く、枝の伸びはスパータイプに似る。皮目の大きさ、多少とも「中」である。葉の鋸歯は鈍鋸歯、葉色は緑である。花芽の着きがよく、早期結実

性で腋芽花の着生も多い。また、側枝の発出の難易は「中」で、短果枝の着生が多く、豊産性である。開花日は「ふじ」より1日程度早い。1果重は220g程度、果形は扁円形で玉揃いは良い。果皮を被う色は濃い赤で縞はない。着色量は「多」である。果肉の色は黄白色、硬度は16ポンド程度、糖度は12～13%、酸度は0.36g/100ml程度で、食味は甘味で3品種の中では最も食味の評価が高い。貯蔵力は普通冷蔵で2週間程度である。後期落果はほとんどみられない。耐病性の程度は、斑点落葉病に対して「つがる」より弱く、「ふじ」並みである。自家不和合性遺伝子型はS9S28である。

4 栽培上の留意点

- (1) いずれの品種も収穫が遅れると落果や果肉の軟化がみられるので、適期に収穫することが大切である。収穫適期はていあ部の地色にまだ緑色が残っているところである。
- (2) いずれの品種も果実の熟期が揃わないので、2～3回に分けてすぐりもぎをする必要がある。
- (3) 8月中旬に収穫される極早生品種は、農薬の使用時期の問題から9月以降に収穫される品種と混植することができない。したがって、極早生品種の栽培に当たっては、極早生品種だけをまとめて栽植する必要がある。これら3品種は、自家不和合性遺伝子型から相互に交雑和合性である。

表1 ‘あおり11’、‘あおり12’、‘あおり16’の樹の主な特性

品種名	樹姿	樹勢	節間長	皮目の 大きさ	皮目の 多少	葉色	葉縁の鋸歯	側枝の発出 の難易	腋芽花 の着生
あおり11	開長	中	中 (3.1cm)	小	少	淡緑	鋭鋸歯	易	多
あおり12	開長	中	中 (3.7cm)	小	少	緑	鈍鋸歯	難	多
あおり16	中間	中	短 (2.3cm)	中	中	緑	鈍鋸歯	中	多

表2 ‘あおり11’、‘あおり12’、‘あおり16’の生態

品種名	発芽日	開花日	満開日	落花日	収穫始め	満開から収穫始め までの日数
あおり11	4月9日	5月4日	5月10日	5月16日	8月11日	93日
あおり12	4月9日	5月6日	5月12日	5月18日	8月12日	92日
あおり16	4月5日	5月4日	5月9日	5月15日	8月12日	95日
ふじ	4月8日	5月5日	5月11日	5月16日	—	—

注) 2001～2005年の平均値

表3 ‘あおり11’、‘あおり12’、‘あおり16’の果実品質

品種名	収穫日	1果平均重 (g)	硬 度 (lbs)	糖 度 (%)	酸 度 (g/100ml)
あおり11	8月11日	226	13.4	11.6	0.40
あおり12	8月12日	300	13.8	11.7	0.58
あおり16	8月12日	215	16.5	13.2	0.36
夏 緑	8月4日	189	14.0	11.9	0.42

注) 2001～2005年の平均値

表4 切り枝接種試験による斑点落葉病の発生程度 (2005年)

品種名	調査葉数	発病葉率(%)	被害度
あおり11	15	0.0	0.0
あおり12	15	0.0	0.0
あおり16	15	40.0	7.8
つがる	15	0.0	0.0
ふじ	15	40.0	8.9
スターキングデリシャス	15	100.0	31.8

$$\text{被害度} = \frac{\sum (G \times n)}{N \times 6} \times 100$$

n : 病斑指数 (G : 0～6)
N : 調査葉数